ZOCALO 2021 4▸5

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

「コレクション 4つの水紋」担当学芸員のおしゃべり

この春1本目の展覧会は、「コレクション 4つの水紋」です。当初は2020年7月から開催予定でしたが、コロナ禍でこれまで2度の会期変更を行いました。開催前、担当学芸員2人に展覧会やコレクションについて話してもらいました。

菊地学芸員(以下、K)：今回は普段企画展を行っている2階の展示室でコレクション展を開催します。コレクションを幅広く楽しんでいただけるよう、73作家130点の作品をご紹介しています。

佐伯学芸員(以下、S)：1階の展示室でお見せできるのは50点程度ですので、今回はコレクションに親しんでいただけるよりよい機会になったと思います。私は埼玉近美に入って1年経っていないので、初めて展示室で見る作品が数多くありました。

K：フェルナン・レジェのタペストリーなど、久しぶりに収蔵庫から出した作品は多いですね。

S：いつも収蔵庫で見ていても、展示室に出すと雰囲気が変わって見える作品もありますよね。

フェルナン・レジェ《誕生日》1950年頃

K：そうですね。たとえば人物を型取りした重村三雄の作品は、展示してみると存在感がぐっと増したように感じられます。

S：重村の作品は、展覧会をご覧になったあとぜひ屋外の作品もご覧になっていただきたいですね。

K：はい。屋外には2点あって、どちらも館内からよく見える位置にあります。私は、当館の外階段の《階段》にリアクションしているお客様をよく見かけます。公園内で遊ぶお子さんが立ち止まってじっと真顔で見ていることもあれば、笑って写真を撮る方や、作品の横に座って過ごされる方などいろいろです。

S：私は埼玉近美に入る前、まさに《階段》の座り込む女性の横に座って写真を撮りましたよ(笑)

K：そうなんですか、じゃあもしかしたら私はその場面を見かけていたかもしれないですね(笑)。ご覧になる方のリアクションといえば、私は常設展・収蔵品担当なので、MOMASコレクションのアンケートを必ず読みますが、そのなかで、「あの作品を久しぶりに見られてよかった」というような感想が印象に残ります。

S：そうですよね。収蔵品は常に展示しているとイメージされる方は多いと思いますが、展示スペースや保存上の観点などから難しいので、そういう感想もいただきますね。

K：また、収蔵品担当として「あの作家の作品はいつ見られますか」というお問い合わせも受けますが、1年以内に展示予定がなく、明確にはお答えできない時もしばしばあります。なので今回は、伊東深水や森田恒友などこれまで展示希望のお声があった作家の作品はなるべく出すようにしました。

S：今回はそういったご希望にお応えできる良い機会になりましたね。

K：開館したら楽しみに見に来ていただけたらうれしいです。佐伯さんは展覧会のなかでとくに気になる作家はいますか。

S：私はシャルロット・ペリアンなど女性作家に注目していただきたいです。女性作家の名前が表に出てきづらかった状況が分野を問わずあるなかで、ペリアンの活躍と交流の幅広さには改めて驚かされます。

K：そうですね。同じく女性作家の奥原晴湖は明治時代初めに活躍した画家ですが、男物の羽織を着ていたり、断髪していたりと「男勝り」のイメージを伝えるエピソードが残っています。晴湖の魅力であると同時に、男性社会のなかで苦労したことも多かったのだろうなと思わせます。

S：実は、晴湖やそのほかの日本画の作品は、今はまだ展示していないんですよね(2021年2月下旬)。

K：はい。とくにデリケートな日本画などの作品は、開館が決まったら直前に展示することになっています。

奥原晴湖の《仙境群鶴》を展示するケースです。

S：まだケースが開いていたり、空のケースがあったりと、展示作業中の状態が続いていて、落ち着かないような、不思議な気分です。

K：当館には単独で掛軸や屏風を展示できるケースがないので、展示ケースを川越市立美術館さんにお借りしました。会期変更などにもご対応いただき、大変お世話になりました。

クロード・モネ《ジヴェルニーの積みわら、夕日》1888-1889年

横山大観《漁村曙》1940年

S：新型コロナですとか、非常事態が起こったときは会期変更はもとより、他館から借りる予定の作品が借りられなくなるなどいろいろなことが起こりますよね。

K：そうですね、当館の収蔵作品を他の美術館にお貸出しする期間も変更になります。

S：コレクションの展覧会だと展示作品の変更もできますし、柔軟な対応ができることも強みのひとつだということを今回の展覧会で実感しました。

K：コレクションはこれからより一層充実させていきたいですね。

S：「コレクション 4つの水紋」では、モネ、ピサロ、フジタや横山大観、小村雪岱(※)など人気の高い作家の作品も多く展示しています。不安な状況が続きますが、どうか当館では楽しんで過ごしていただけたらと思います。

K：そして、この展覧会のなかで印象に残る作品がありましたら、今後同じ作品がどう展示されるのか、1階MOMASコレクションでのまた違った見せ方を楽しんでいただきたいです。

展覧会の雰囲気をまとめたリーフレットを税込500円で販売します。よろしければお手に取ってみてください！

※会期中一部作品の展示替えを予定しています。小村雪岱《青柳》《落葉》の肉筆画は、前期(4/25(日)まで)に展示いたします。

destination somewhere

アーティスト・プロジェクト#2.05 スクリプカリウ落合安奈 Blessing beyond the borders ー越境する祝福ー を終えて

インスタレーション・絵画・写真・映像など、多彩な表現手段を駆使して自らのイメージを形にするスクリプカリウ落合安奈。今回の「アーティスト・プロジェクト#2.05　スクリプカリウ落合安奈　Blessing beyond the borders－越境する祝福－」では、3点のインスタレーションと1点の新作映像を展示しました。メインとなった会場では大型のインスタレーション《Blessing beyond the borders》と《骨を、うめる－one's final home》の両者が、鎖国と国際結婚というテーマを共有し、また地球儀やコンパスに似た渾天儀のゆらめきによってゆるやかに結びつくことで、より豊かで重層的な世界観が立ち上がりました。生と死、光と闇、過去と現在、東洋と西洋、<こちら側>と<あちら側>—彼女の作品は常に物事の二面性や境界をとらえ、さまざまなイメージが重なり合います。

展示の準備が進む中で、「越境する祝福」という全体を貫くタイトルは、スクリプカリウ落合が来場者に示す解答ではなく、問いかけなのだということが明らかとなりました。作者いわく、「越境する祝福」とは、全人類に雨のように降り注ぐイメージです。スクリプカリウ落合は特定のメッセージを鑑賞者に押し付けることは意図していません。しかし、感染症・デマ・差別・監視社会・移動の制限など、20世紀に克服されたと思われた諸課題が、実はすぐ足元に息をひそめていたことが露わとなった現在、文化の差異／共通性や国境を取り上げた作品を体感する中で、来場者が自らの胸中ではたしてどのような形で「越境する祝福」が可能なのかを考えるよう促されました。鑑賞者のコメントには、現在の世の中と重ね合わせて作品を体験し、怖さや心地よさなど、さまざまな感覚を覚えたという反応が多くみられました。

今回の展示は、新型肺炎の影響による会期の変動(2021年2月7日までから2020年12月23日までに短縮)やリサーチの予定変更に始まり、限られた予算・時間・安全上の制約の中で、必ずしも作者の思う通りにいかなかったことも少なからずあったと想像されます。美術館側が提供できた機材や空間設備についても決して万全とはいえない条件の中、スクリプカリウ落合がベストの成果を全力で模索する様子を傍らで感じました。ここ数年で大いに活躍の場を広げ、メディアからの注目も集めている彼女は、今後さらに大規模な展示の機会を持ち、より難しいシチュエーションも経験していくはずです。展示のテクニックとして、与えられた空間の中で、作品同士を結びつけるのか／切り離すのか、鑑賞者と作品の距離感、より美しい仕上がりに見せる設営のノウハウ、機材の知識などが今後も課題となるでしょうが、常に自分を高めることに余念のない作者のさらなる飛躍を願ってやみません。

アートの力で社会を変えることに真剣に取り組むスクリプカリウ落合、次は何に挑み、私たちをどこへいざなってくれるでしょうか。

(G.R.)

1

2

3

4

1 《Blessing beyond the borders》各地で信仰や神事を捉えた写真群，サウンド，ライト｜サイズ可変｜2019年
2 《骨を、うめる－one's final home》カーテン，ベトナムの古い椅子，写真，映像，サウンド，風，モーター，アクリル，芯棒，ライト｜サイズ可変｜2019年
3 《The backside over there》写真，木｜サイズ可変｜2015年－
4 《Double horizon》映像｜7分42秒｜2020年